

●「秘境」の魅力を発信

巨木の前に立つと、人は誰でも悠久の「いのち」を感じる。その樹木に手を当て、耳を当てて巨木の「いのち」の鼓動を体感しようとする。しかし、その姿全体を見上げるとき、樹木の「いのち」の底に神霊を感じて、自然の本質に畏敬（いけい）する。

今、巨木ブームである。屋久島の縄文杉には、年間数万人が訪れるという。巨木は、静寂の中に立っているだけであるが、現代人が心の中に失っているものを教えているのかもしれない。

椎葉村の八村杉は、同村十根川地区の十根川神社境内に立つ。目通りの幹回り一三・三メートル、高さ五四・四メートル。境内を守るように、イチイガシやトチノキの巨木が生い茂っている。

八村杉から、山頂の方に車で数分登ると、大久保のヒノキがある。端正な八村杉に比べて、ヒノキは無数の支幹と枝が分岐して、風雪に耐

えた複雑な姿を見せる。目通りの幹回り九・三メートル、高さ三十二メートル。巨大な枝がつくる傘の広がり、高さと同じほどで直径三十二メートルに達する。

八村杉も大久保ヒノキも、樹齢八百年以上。国指定の天然記念物で、大木に触れようと訪れる人も多い。

十根川神社門前の十根川集落は、狭いふもとの斜面に石垣を築いて、道沿いに並ぶ。山奥の村の集落形態をよく残していて、一九九八（平成十）年に国指定の重要伝統的建造物群保存地区となった。

椎葉村は秘境と呼ばれる。この地に伝えられた平家落人伝説が、その印象を深めたのであろう。文治元（一一八五）年、壇の浦で滅亡した平家の落人は、源氏の追っ手を避けて椎葉村に入って定住したという。やがて源氏の知るところとなり、那須大八郎宗久が、追討の勢を率いて



八村杉。樹齢800年以上、「いのち」の重みを伝える

椎葉に入った。陣所の仮小屋の屋根を椎の葉で覆ったので、椎葉山という地名が起こつたと伝えている。八村杉も大八郎の手植えであると伝承されている。

大八郎は椎葉山にひっそりと生きる落人たちに寛容を示し、鶴富という女性と恋に落ちたが、鎌倉に呼び戻され、椎葉山を去った。この伝承は「椎葉山根元記」と「椎葉山由来」という二編の書き物によって伝えられた。二編とも江戸時代に入って書かれたと推測されている。

日向市から約七十五キロ。村には国指定重要民俗文化財の「椎葉神楽」も伝承されており、巨木とともに現代人に秘境の魅力を発信している。

永松 敦